





"11"の旅路を一言で説明することはできない。本作品は、愛の概念、人の生き方、テクノロジー、そして最大のテーマである「無我」と「無形」を探求している。 すべてはイックス・ウォン・ティエンパオとアーロン・コク・アーホクの愛から始まった。繰り返されるパンデミックにより、孤立した生活が新しい日常となっている。 人々は物理的には遠く離れていても、心理的には非常に近い存在にある。現代の技術は、生と死の境界を越えても、人々の心を再会させることができるの だろうか。

「常に一緒でありながら、永遠に離れている。」"11"の精神は、2人の愛からさまざまな形へと広がり、短編映画『Ward 11』やVR作品《Chroma 11-無 舞之間ー》に留まらないものとなっている。人々がイックスとのコミュニケーションを続けるための手段でもある。すべての会話は愛の物語であり、その中で愛は個性や死を超越する。

私はイックスの儀式的な生活スタイルに感銘を受けている。彼は、喪失によって精神が衰えることなく、むしろ活気づけられるように自身と恋人を大切にしている。VRによる没入型の物語では、従来の画面がなくなり、鑑賞者を登場人物とそのストーリーにより強く引き寄せる。鑑賞者は、視覚と聴覚の刺激を通じて、その瞬間の登場人物の過去と現在を体験する。私のチームにとって、これは初めてのVR制作の試みである。

The journey of 11 simply cannot be explained in a few words. It explores the ideas of love, the conduct of life, technologies, and—more importantly—egolessness and formlessness. It all started with love between Ix Wong Thien-pau and Aaron Khek Ah-hock. With the recurring pandemic, living in isolation has become the norm. People are so far apart yet so close. Can modern technology bring people's minds back together, even across the border of life and death?

Always together yet forever apart. The spirit of 11 has extended from the love between the two of them into various forms. This is more than a short film Ward 11 or a VR work Chroma 11. This is also the channel for individuals to continue communicating with lx. Every conversation is a love story, in which love transcends individuality and death.

I admire lx's ritualistic lifestyle. He nourishes himself and his lover so that his spirit is not dampened by his loss, instead, it becomes more vibrant. In immersive storytelling, the screen frame we are familiar with no longer exists, which brings the viewers closer to the characters and their stories. Viewers experience the past and present of the characters at that moment, with the help of visual and auditory stimuli. This is my team's first attempt at VR creation.

《Chroma 11 一無舞之間一》は、映画芸術、インスタレーション、ダンスパフォーマンス、そして仮想空間を融合させ、ダンサーのイックス・ウォン・ティエンパオ(マレーシア出身)とアーロン・コク・アーホク(シンガポール出身/以下ホク)の愛の物語を描き出す。2人は20年以上にわたり愛し合い、幸せに踊り続けたが、人生は彼らに多くの試練を与えた。ホクは不幸にもHIVに感染した後、がんと診断され、2019年初めに亡くなった。病気にもかかわらず、2人は踊り続け、身体的な状態が変わっても、精神と絆はより強くなった。

今回のプロジェクトは、創造的なダンス・ドキュメンタリー映画『Ward 11』のさらなる展開であり、監督のツァン・ツイシャンが2017年から2019年にかけて、イックスとホクと共に発展させた。「Creative Meeting Point on Screendance一香港×シンガポール」のもと、西九龍文化区庁(WKCDA)、シティ・コンテンポラリー・ダンスカンパニー(CCDC)、そしてシンガポールのシネムーブメントとの共同制作により実現した。ホクが亡くなる前、ツァンは約2年間にわたってイックスとホクに同行し、ホクの人生の最終章を記録した。『Ward 11』は2020年の第25回ifva賞

(オープン部門)にて銀賞を受賞した。

《Chroma 11─無舞之間─》は、イックスとホクが 物理的に一緒にいた時のビデオ映像と、Depthkit というソフトにより捉えられた立体映像を組み合わせ た多層的なナラティブを使用し、失われた最愛の人 を思い出すイックスの心の中へと鑑賞者を導く。踊る 2人の影を追いかけ静止させるシーン、ダンスとの出 会い、彼らの冒険の地形をなぞる様子など、2人が 共に過ごした生活の記憶の断片が浮かび上がる。 もっとも平凡な瞬間においても、恋人たちは愛の言 葉を囁き、会話は流れる。明確な直線的な物語は存 在せず、浮かび上がってくる物語は、生きている1人 の人物だけでなく、生と死を取り巻くすべての人々の 愛の旅を描き出している。イックスとホクの最後のダン スを通じて、彼らの関係は形、質感、光へと変化し 始める。《Chroma 11-無舞之間-》は、新しい メディアを活用した没入型のダンス・ストーリーを届 け、愛する人々を記憶に留める。そしてダンスの動き を永遠に絶えさせることなく、人生が終わった後も 踊り続けることを可能にする。

イックスは被写体であると同時に、創造過程における参加者でもある。その結果は、イックスと監督

の最も誠実な感情を明らかにする、正直な開かれた対話になる。《Chroma 11—無舞之間—》は、故人の苦痛ではなく、彼の幸福を示そうとしている。その旅の中で鑑賞者は、ホクがすぐそばにいると感じているイックスの日常生活を見る。対話を通じて、イックスは異なる空間内での存在と不在を鑑賞者に感じさせる。毎日が旅であり、旅自体が目的地である。

《Chroma 11—無舞之間一》は、夢と現実における禁じられた愛、そして無条件の愛の物語を包含する。失われた愛の物語は、VRの旅を通じて思い出を訪れ、過去、現在、未来を結ぶ。孤独から始まる本作は、観客に別れの恐怖を超えることを可能にし、恐れを知らない状態を達成させる。人生において別離や喪失に立ち向かうことができれば、生と死を穏やかに受け入れることができる。作品には直線的な物語はなく、鑑賞者は存在と非存在の中間にある精神になる。精神的な存在として、鑑賞者は個人的な記憶に入り込み、イックスのホクに対する愛情を体験する。鑑賞者は、2人の愛と記憶を象徴する家具や花、ワイングラスなどさまざまなものに出会う。

Chroma 11 combines cinematic art, installation, dance performance and virtual space to tell the love story of two dancers, Ix Wong Thien-pau (Malaysia) and Aaron Khek Ah-hock (Singapore). They have been in love and danced together for more than 20 years happily, but life has given them many challenges. Hock unfortunately contracted HIV, and later cancer. He died in early 2019. Their dance never stops, even with their illness. The body condition changed, but their spirits and bonding get stronger.

This project is a further development of a dance documentary film, *Ward 11*, filmed by director Tsang Tsui-Shan and co-developed with Ix and Hock in 2017–2019 under "Creative Meeting Point on Screendance – Hong Kong x Singapore," which is developed by West Kowloon Cultural District Authority (WKCDA), City Contemporary Dance Company (CCDC) and Singapore's organization Cinemovement. Before Hock passed away, Tsang had been following Ix and Hock almost two years, recording the final moments of Hock's life. The film won the Silver Award at the 25th ifva Awards, Open Category in 2020.

Chroma 11 uses multi-narrative, combining

video footage taken when Ix and Hock were physically together, and volumetric images captured by Depthkit, to take the viewer on a journey into the mind of Ix as he remembers his lost love. Fragments of past memories appear of their life together. Tracing and arresting a dance couple's shadows, encountering the dance, trekking the terrains of their adventures. Listening to lovers' whispers, even at the dullest moments, words of love, conversations continue to flow. There was not a clear linear narrative in place, and the story that emerged is not only about one living character. It is about everyone's love journey, about life and death. Through Ix and Hock's last dance, their relationship began to transform into shapes, textures and lights. Chroma 11, through the new medium of an immersive dance story, preserves people we love, and lets the dance motion never die, even in the afterlife.

Ix is both a subject and an active participant in the creative process. The result will reveal the sincerest emotions, an open and honest dialogue between the subject and the director. *Chroma* 11 does not intend to showcase the pain of the deceased but his joy. During the journey, the

participant sees the daily life of lx; he does not feel that Hock has really left him. His dialogue with the participant allows the latter to feel the sense of presence and absence within different spaces. Every day is a journey, the journey itself is home.

Chroma 11 holds the tale of forbidden love, unconditional love, in dreams and in reality. A story of lost love, through the VR journey revisiting memories, experiencing past, present and future. Beginning from an isolated loneliness, Chroma 11 allows the audience to transcend from the fear of separation to fearlessness. As long as we can face separation in life, we can find peace in life and in death. There is no linear narrative; rather, the participant becomes a spirit, halfway between existing and not existing. As a spirit, the participant enters into private memories. and experiences the love that lx had for Hock. The participant will encounter different objects, such as the furniture, flowers, wine glasses, representing love and memories.

(Ward 11)

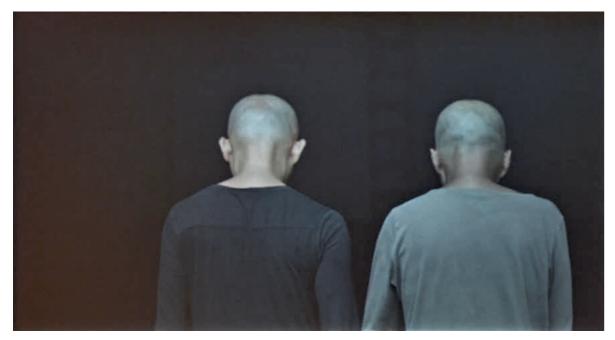
映像 Video 16'43" 2019 長年のパートナーである2人のダンサー、イックスとホクの生活と彼らの作品を記録したドキュメンタリー。2019年に癌のため逝去したホクの最後の日々が撮影された。

This documentary film focuses on the life and work of two longtime partners, dancers Ix and Hock. It was filmed during the final days of Hock, who died of cancer in 2019.



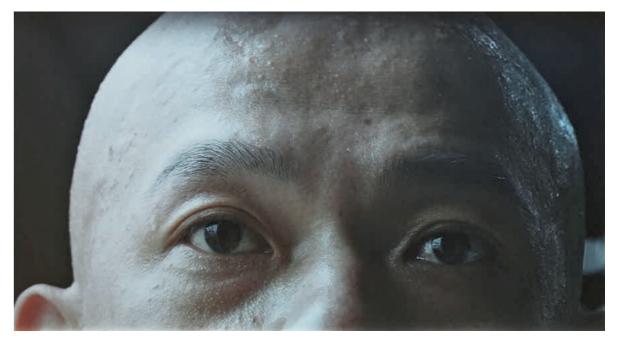


S OPEN SITE 8 TSANG TSUI-SHAN PLATES







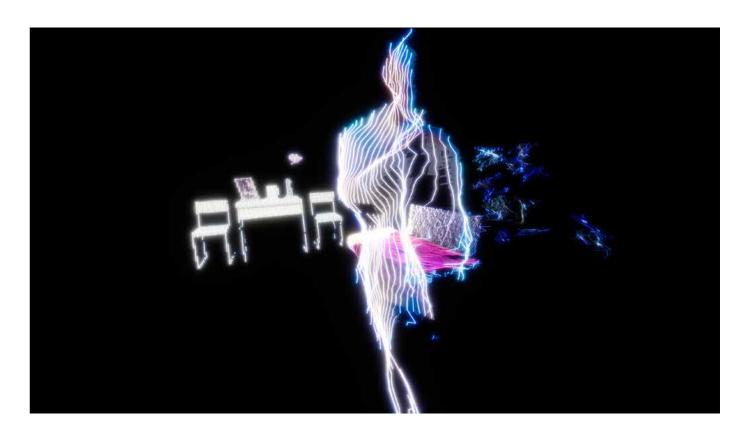


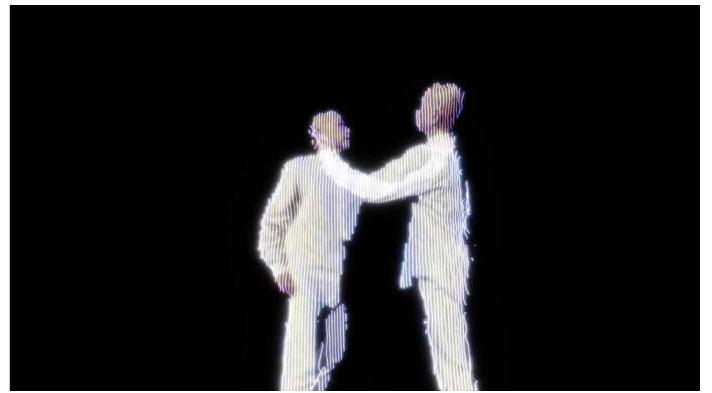








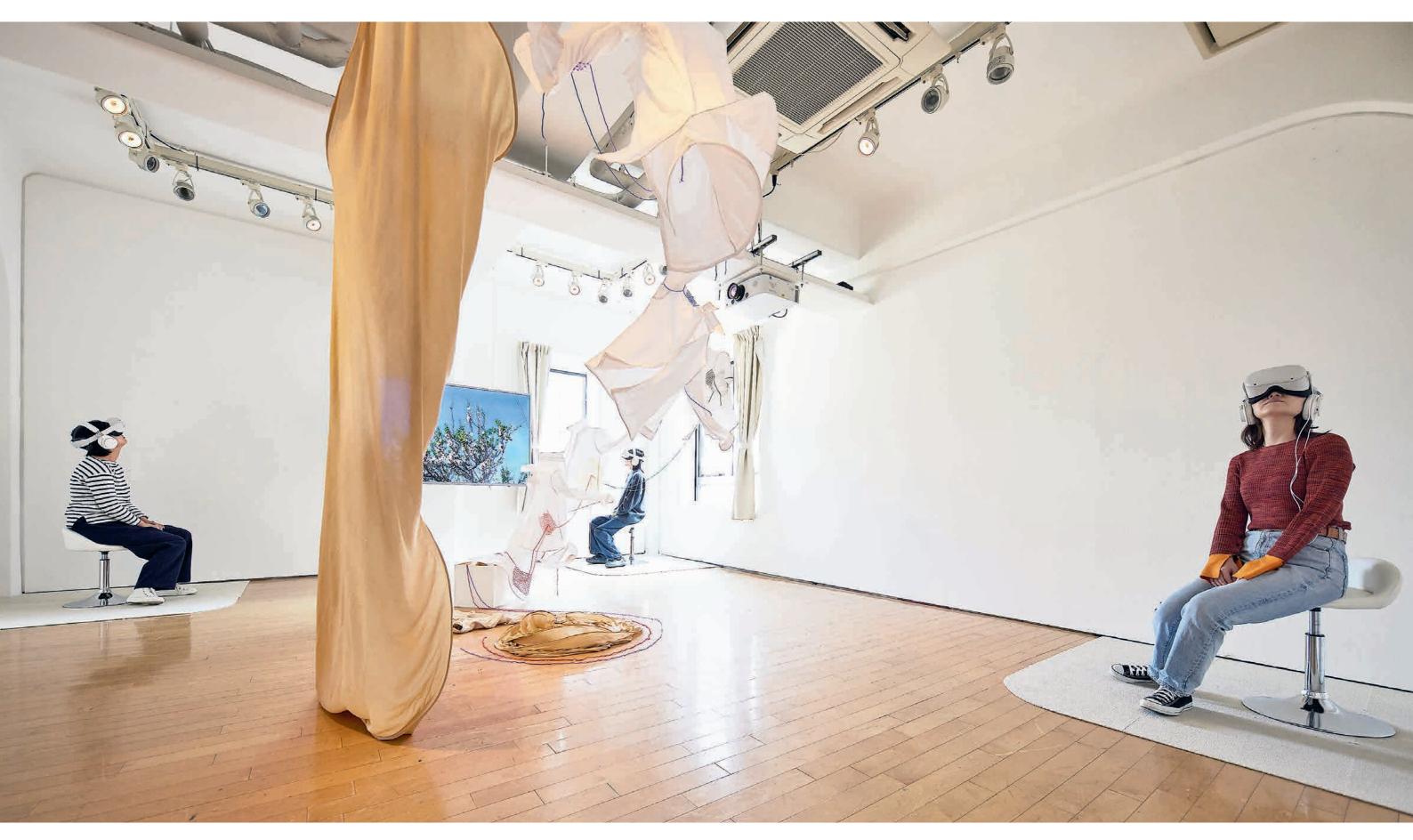




《Chroma 11—無舞之間—》 Chroma 11

メタクエスト2 Meta Quest 2 13'00" 2022 ドキュメンタリー映画『Ward 11』に出演したダンサーのイックスと、2019年に病死したパートナーのホクとの再会を描くVRプロジェクト。生者と死者の世界の架け橋としてテクノロジーを使い、2人の愛の物語を異なる次元で語り直す。

This VR project portrays a reunion between the dancer Ix and his partner and fellow dancer Hock, who died of illness in 2019. The duo previously appeared in the documentary film *Ward 11*. With technology as a bridge between the worlds of the living and the dead, the project retells their love story in a different dimension.



TSANG TSUI-SHAN

メイキング映像 Behind-the-scene video 2'30" 2022 《魂なき魂たち》 Soul-less Souls

ー ホワイトシャツ、7色の糸、金属ワイヤー White shirts, 7 colors of yarns, metal wire サイズ可変|Dimensions variable 2023 白いシャツは魂なき魂たちの魂 ダンスは7色の糸の踊りなき踊り; 私たちの旅 金属ワイヤーのフレームに囲われた旅行記 身体と精神、 過去と現在、

記憶と瞬間の歌

The white shirts are the soul of soul-less souls
The dance is dance-less dances of 7 colors of yarns;
Our journey
Travelogue within the frame of the metal wire
The song of body and mind,
past and present,
memories and the moment









プロジェクト制作とVRをメディアとして使用するコンセプトの記録。

Documents of the project production and the concept of using VR as a medium.

14 OPEN SITE 8 TSANG TSUI-SHAN PLATES

2023年12月16日(土)

December 16 (Sat), 2023

- ・イックス・ウォン・ティエンパオによるパフォーマンス
- ・トーク「アジアにおけるイマーシブ・シネマ」

登壇者: イックス・ウォン・ティエンパオ、ジェイソン・ラム、ケイティー・ファン、ツァン・ツイシャン、テレサ・クオン 通訳: 池田 哲

- Performance by Ix WONG Thien-Pau
- Talk "Immersive Cinema in Asia"

Speakers: Ix WONG Thien-Pau, Jason LAM, Kattie FAN, TSANG Tsui-Shan, Teresa KWONG Interpreter: IKEDA Satoshi



16 OPEN SITE 8 TSANG TSUI-SHAN

白いシャツ、白いスラックス、白い靴下といった格好だ。箱を置いた イックスは、糊の利いた白いシャツを取り出し、それを身にまとう。シャ ツの縫い目からは青いチャクラの糸がこぼれている。彼はシャツの 腕を広げ、胸部に身を沈める。そして、魂を揺さぶるアカペラのダン スマイムを通じて、空っぽの白いシャツを単なる服からダンスパート ナーへと変え、シャツに命を吹き込む。

晴れた冬の午後、TOKAS本郷の白壁に囲まれたギャラリー空 間でイックスのこの生々しいパフォーマンスを目の当たりにし、私は ホクの存在と不在を同時に感じ始める。

イックスは、2019年に制作された短編映画『Ward 11』に登場 する2人の登場人物のうちの1人である。このドキュメンタリー映画 は、イックス・ウォン・ティエンパオとアーロン・コク・アーホクが共にし た最後の親密なダンスと日々を捉えている。2人は人生でも、舞台 上でも、スクリーン上でもパートナーであった。 香港のインディペン デント映画監督ツァン・ツイシャンが2人の主人公と共同制作したこ の17分間の映画は、隣接する展示スペース全体を占める巨大な スクリーンで上映されている。

親密さと芸術的な縁を間近で、実物大の映像で捉えることは、すで に深く感動する体験だ。この繊細な思い出のモンタージュを観た後、 愛と喪失に関するトランスメディアの物語のために心を準備する。

観客である私たちは、イックスとホクの芸術的で感情的な関係 の物語と現実の葛藤に徐々に引き込まれていく。それは複雑な旅 うか」とイックスは考える。「喜びの瞬間を見つけることができるのだ であり、「いつも一緒だが、永遠に離れている | ということが 「11 | の 平行する数字によって象徴されている。恋人でありながらライバル でもある2人は、それぞれが自我を持つ独立した芸術家でありなが ら、彼らの記念日である11月11日から永遠に結びついている。

ホクとイックスは以前にも、意に反して物理的に離ればなれに なった経験がある。マレーシア生まれのイックスは、2008年にHIV 陽性と診断されたことでホクの故郷であるシンガポールから強制送とだろう。 還され、その後5年間、彼らは国境を越えた関係を続けた。しかし、 生と死という無形の境界によって分かれた場合はどうなるのだろう か。イックスは少なくとも一度はHIVの致命的な支配から抜け出す ことができたが、ホクは最終的に2019年1月19日の午後11時11 分に癌で亡くなった。

VR(仮想現実)を新たな表現手段として探求している段階にあり、そ れを通じて彼らの旅を深化させ、ホクを再び登場させることを目指し ていた。そこで、彼女はイックスに最も実現したい願いを尋ねたとこが呼び戻された」。 ろ、「もう一度ホクと踊りたい」とのことだった。

同年、ツァンは香港で新たなコラボレーター・チームを結成し、VR 作品《Chroma 11一無舞之間一》を制作した。デジタルの色彩、 動き、音をとおして11の精神を甦らせる作品である。インタラクティ ブ・アートとゲーム制作の経歴を持つクリエイティブ・テクノロジストの ジェイソン・ラムは、ボリュメトリック・ビデオ(容積のある動画)のハイブリッ シェリス・フォン | 東京を拠点とするフリーランスのジャーナリスト。アートサイエ ド2D-3D画像を撮影するためにDepthKitを使用するなど、さまざ まなモーションキャプチャー手法を試み、ハードとソフトを試行錯誤し ながらVRの可能性を拡張して物語を紡いだ。元映画編集者で現 在はニューメディア・アートプロデューサーのケイティー・ファンは、枠 組みのない仮想空間内でリズムと感情を伝える新たな方法を模索 した。ツァンの長年の映画プロデューサーであるテレサ・クオンは、 2022年の「第79回ヴェネチア国際映画祭」Venice Immersive 部門での世界初公開、香港での上映、そして今回の東京での上映 に至るまでの4年間、《Chroma 11―無舞之間―》の制作に携 わってきた。プロダクションコーディネーターのケイト・ロウを含む6人 のコアチームは、2023年12月14日にTOKAS本郷で、彼らのVR 作品を発表した。

イックスが茶色の段ボール箱を持って部屋に入る。剃った頭に 「人を愛することは、相手の死後であってもなお幸福である。」 - イックス・ウォン・ティエンパオ

> 愛と悲しみという繰り返しのテーマに感動しながら、私は心を 白紙にしてVRヘッドセットを装着し、仮想感覚世界へと没入 する。『Ward 11』の鮮やかで臨場感あふれる映像と異なり、 《Chroma 11—無舞之間—》の映像は抽象的で、非文脈的で あるため、個人の解釈に開かれている。光の線がポートレートを描き 出し、形が解体され、無限の黒いキャンバス上で動きが流れる。星 空のトンネルや光る棒、雷の指先、幽霊のような姿が現れるダイナ ミックな世界で、イックスが振り付けたダンスは不完全に伝わる。一 方で、風の音、水の波紋、現代的な弦楽器から成る音の風景が、 全知の存在のようなピアノのミニマルな音によって強調され、私たち を現実に引き戻す。声の音に引き込まれ、暗闇に消える赤い折り鶴 を追いかけるように、スツール上で私は頭を回し、足を動かして周囲 を見渡す。

イックスのアバターが巧妙に作られた中間世界でホクの亡霊と 優雅に踊る中、私はこの肉体を持たないダンサーたちに共感を覚 え始める。自身の身体の衰えや愛する人の末期的な病という避け ホクとイックスが抱き合いながら踊り、生きるように踊る姿を見て、 られない現実を目の当たりにしたり、経験したりすると、(Chroma 11-無舞之間-》のVR世界は軽くて楽しい夢のようだ。 そして 今回の物語は、究極的な、無限の自由な動きと主体性に満ちてい るイックス自身によって語られる。

> 「とても悲しいと思うという当たり前のことを、楽しむことは可能だろ ろうか。私の信念は、人を愛することは恋人の死後であってもなお 幸福であるということだ」ホクの死後もVRで続いているこの旅は、 イックスに新しい方法で自己を見つめる機会を与えた。「複数の複 雑な感情が含まれている。悲しいことは必ずしも悲しいわけではなく、 "不器用に幸せ"なのかもしれない」と言う。ホクは、この仮想空間 でイックスが繰り広げるソロダンスの深い誠実さに微笑んでいたこ

中国の伝統には、人が亡くなってから49日目にその人の魂を呼 び戻し、その後あの世へ送り出す儀式がある。イックスにとって、 49日という期間はあまりにも短かったため、ホクに段ボール箱の中 で共に過ごすよう頼んだ。イックスは東京でのパフォーマンスを、箱 『Ward 11』はホクの逝去後すぐに完成したが、ツァンはすでに の周囲で11のジェスチャーを交えて開始した。白いシャツとのダン スは、彼とホクが最後に共に踊ったダンスを思い起こさせる。「私 は人生の半分を失った」とイックスは語る。「しかし、失われた半分

> 「Chroma」を日本語で「黒間」と読めることは偶然ではないかもし れない。それは2枚(1と1)の白いシャツの間に存在する喜びの黒 い空間を象徴している。

> ンス、インディーズ映画、自然の生態系、仮想的な超短編小説、日本の辺境 地での自転車旅に関する記事などを執筆している。

Ix enters the room with a brown cardboard box. He has a shaved head, wears a white shirt, white slacks, white socks. Ix puts down the box, climbs in and out with a starched white shirt. He drapes himself in the stiff shirt, sparse blue chakra threads trailing from its seams, extends its arms, burrows in its chest. Then, through a soulfully choreographed a cappella dance mime that transforms the empty white garment from accessory into dance partner, lx brings the shirt to life.

Witnessing this raw live performance by lx on a sunny winter afternoon within the white-walled gallery space of TOKAS Hongo, I begin to feel the simultaneous presence and absence of Hock.

Ix is himself one of two characters in a short film made in 2019: Ward 11, which documents the last intimate dances and days together shared by Ix Wong Thien-pau and Aaron Khek Ah-hock – partners in life, as on stage, as on screen. The 17-minute film, directed by Hong Kong independent filmmaker Tsang Tsui-shan in direct collaboration with its two protagonists, is projected on a giant screen that occupies the entire adjacent room.

Seeing Hock and Ix embrace as they dance and dance as they live, catching glimpses of their intimacy and artistic complicity in life-sized images at close range, is already an emotionally immersive experience. After watching this sensitive montage of memories, I am prepared for a transmedia narrative of love and loss.

As spectators, we are gradually drawn into the true story and real-life struggles of the artistic and emotional relationship between Ix and Hock. It's a complicated journey, which they symbolize through the parallel digits of 11: "Always together, yet forever apart." Both lovers and rivals, each a singular artist with his own ego, yet each one invariably bound to the other one for infinity, beginning with their anniversary on November 11.

Hock and Ix have been physically separated against their will before, most notoriously across national borderlines, when Malaysian-born Ix was deported from Hock's native Singapore for being diagnosed as HIV-positive in 2008, and the two maintained a cross-border relationship for the following five years. But what happens when the two men are separated by the intangible boundary between life and death? If Ix at least once managed to pull himself out of HIV's fatal grip, Hock finally succumbed to cancer in 2019, on January 19. at 11:11pm.

Ward 11 was completed shortly after Hock's passing, but Tsang was already exploring the medium of Virtual Reality as a new way to further their journey, to bring Hock back into the picture. So she asked lx what he wished to do most. lx replied: "I wish to dance with Hock again."

That same year, Tsang gathered a new team of collaborators in Hong Kong to create the VR work Chroma 11, reviving the spirit of 11 in an all-digital spectrum of colors. motion and sound. Jason Lam, a creative technologist with a background in interactive art and gaming, experimented with various methods of motion capture before using DepthKit to shoot hybrid 2D-3D images of volumetric video, tweaking both hardware and software through trial and error, pushing the limits of VR in order to tell their story. Kattie Fan, a former film editor and current new media art producer, investigated new ways of creating rhythm and conveying emotions within this frameless, virtual space. Teresa Kwong, Tsang's longtime film producer, has accompanied Chroma 11 over the past four years, all the way to its world premiere in the Venice Immersive section of the 79th Venice International Film

Festival in 2022, back to Hong Kong, and most recently in Tokyo. Together with the production coordinator Kate Lau, these six core team members presented their long labor of VR love in person at TOKAS Hongo on December 14, 2023. CHROMA 11: a Cherise FONG

and

the

awkward

happiness

of

dancing

in the

dark

"Loving someone, even in death, is still bliss."

— Ix Wong Thien-pau

I put on the VR headset with an open mind like a blank slate, buoyed by the recurring themes of love and grief, and let myself be immersed in their virtual sensory world. Unlike the crisp realistic cinematography of Ward 11, the images of Chroma 11 are abstract and decontextualized, thus more open to individual interpretation: sight lines of light sketching portraits, disintegrating forms, flowing movement on a limitless black canvas. lx's choreographed dance moves are imperfectly translated in a dynamic world of starry tunnels, glowing rods, lightning fingertips and ghostly figures. At the same time, we seem to be grounded by a soundscape of acoustic tones: blowing wind, rippling water, contemporary strings punctuated by the minimalist keynotes of an omniscient piano. My attention is drawn to the sound of a voice, chases the flight of a red origami crane into the darkness; I turn my head, moving my feet to swivel around on

As the avatar of Ix gracefully dances with the spectre of Hock in this artfully crafted limbo, I begin to empathize with the disembodied dancers. After experiencing the inescapable realities of personal decline and the terminal disease of a loved one, our physical bodies weighed down by the earthly indignities of human mortality and loss, the VR world of Chroma 11 is a delightful dream. And this time, the story is told by lx — alive with ultimate, infinite freedom of movement and agency.

"Is it possible to enjoy this common thing that you think is very sad?" reflects lx. "Can we find a certain moment of joy? My belief is that loving someone, even in death, is still bliss." This journey that has continued in VR after Hock passed away has led lx to look at himself in new ways: "It contains multiple and complex emotions, so maybe sad is not sad at all, maybe it's 'awkwardly happy'." And no doubt Hock would have smiled at the profound honesty of lx's solo dance with this virtual space.

Chinese tradition has a ritual of calling back the soul of a person 49 days after their death, before sending them off to the afterlife. For Ix, 49 days was too short, so he asked Hock to live with him inside a cardboard box. Ix began his live performance in Tokyo with 11 gestures around the box. His dance with the white shirt relives the last dance he and Hock had danced together. "I lost half my life," says Ix, "but my lost

Perhaps it's also no coincidence that in Japanese, Chroma could be read as "kuroma" (クロマ or 黒間): that joyful black space between two (11) white shirts.

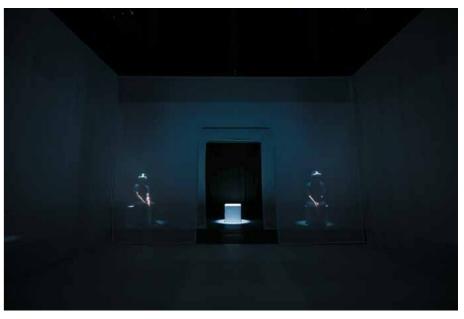
Cherise FONG | Freelance journalist based in Tokyo. She writes about art-science indie film natural ecologies speculative flash fiction and slow traveling by bicycle through remote regions of Japan

OPEN SITE 8 TSANG TSUI-SHAN ESSAY 《Chroma 11—無舞之間一》は、香港初のVRプロジェクトとして、2022年8月にイタリアで開催された世界最古の最も権威ある映画祭のひとつである「第79回ヴェネチア国際映画祭」でワールドプレミア上映された。ヴェネチアに続き2022年9月から10月には、香港の西九龍文化地区にあるFreespaceで開催されたプログラム「Phygital-D」で上映された。合計93セッションが行われ、600人を超える観客がこの没入型映像を体験した。その後、2022年11月に「VR Days in the Immersive Tech Week 2022」(ロッテルダム)、2023年3月には「BFI Flare 2023: London LGBTQIA+ Film Festival」(ロンドン)といったヨーロッパのイベントでも上映が行われた。

また、香港コンベンション&エキシビションセンターの「FILMART」や、「第28回ifvaフェスティバル」のVRシネマで国内外の観客に向けて発表された。《Chroma 11一無舞之間一》は、2023年4月の香港ダンス・アワードで「Outstanding Small Venue Production」を受賞し、新たな演劇体験として異例の成果を示している。さらに2023年10月には「SciFian Festa」(ソウル)、「第27回イフラヴァ国際ドキュメンタリー映画祭」(チェコ共和国)でも発表された。2024年にはマカオとシンガポールでの上映が予定されており、多くの観客がこの領域横断的作品を体験するだろう。

Chroma 11 was the first Hong Kong VR project selected to world premiere at the "79th Venice International Film Festival" in Italy in August 2022. The Venice International Film Festival is the oldest and one of the most prestigious film festivals in the world. Following Venice, Chroma 11 was showcased in the program "Phygital-D" at Freespace, West Kowloon Cultural District in Hong Kong from September to October 2022. In a total of 93 sessions, over 600 visitors participated in this immersive cinematic experience. Then the project was selected to feature in two European events, "VR Days in the Immersive Tech Week 2022" in Rotterdam, the Netherlands, and "BFI Flare 2023: London LGBTQIA+ Film Festival" in United Kingdom, in November 2022 and March 2023 respectively. The project was presented in "FILMART" in the Hong Kong Convention and Exhibition Centre, and the VR Cinema during "28th ifva Festival" to both local and international audiences. The work was recognized as an "Outstanding Small Venue Production" in Hong Kong Dance Awards in April 2023, which marks a unique accomplishment of this new kind of theatrical experience. Then journey continued with an appearances at "SciFian Festa" (Seoul, South Korea) and "27th Ji.hlava International Documentary Film Festival" (Czech Republic) in October 2023. More engagements are scheduled for 2024 in Macao and Singapore, ensuring further opportunities for audiences to experience this interdisciplinary production.







「Phygital-D」展示風景、Freespace、香港、2022 "Phygital-D" Installation view at Freespace, Hong Kong, 2022

ツァン・ツイシャン(ディレクター)

TSANG Tsui-Shan, Director



2012年に「第31回香港国際映画祭」最優秀新人監督賞受賞。 短編映画を皮切りに国際的に作品を発表。人道的な背景をもつ女性の物語に焦点を当てた作品を制作している。2008年に初の長編監督作品「Lovers On the Road」が「第8回南台湾映画祭」最優秀ドラマ賞を受賞。長編2作目となる「Big Blue Lake」は国際的に評価され、「ゴールデンコアラ中国映画祭2013」審査員特別賞、2012年に「上海国際映画祭」アジアン・ニュー・タレント審査員賞を受賞した。2014年にフランスと香港の共同製作による長編ドキュメンタリー「Flowing Stories」を完成させ、2016年にフィルムエイド・アジアの人道主義賞を受賞した。長編映画の他にも異なる芸術分野との対話において境界を拡張し続けており、2015年からは地元のさまざまなダンサーと協働し、ダンス映像作品を制作している。2020年、初のVRプロジェクト「Chroma 11」が「第79回ヴェネチア国際映画祭」 Venice Immersive 部門に正式出品された。

Best New Director of "31st Hong Kong Film Award" in 2012. Beginning with short film productions, her works have been presented internationally. Her films have typically focused on female stories in the humanitarian grounds. In 2008 her first directed feature film Lovers On the Road won the Best Drama Award of "8th South Taiwan Film Festival." And her second feature Big Blue Lake was succeeded internationally, it had won the Jury Special Award of "Golden Koala Chinese Film Festival 2013" and the Asian New Talent Jury Prix of "Shanghai International Film Festival" in 2012, Tsang finished her French/Hong Kong co-production feature documentary Flowing Stories (2014), receiving the FilmAid Asia's Humanitarian Award in 2016. Apart from narrative feature, Tsang keep pushing her boundary in dialogues with different art disciplines, she had been collaborating with different local dancers from 2015 making few dance video works. In 2020, her first VR project Chroma 11 was officially selected by "79th Venice International Film Festival of La Biennale di Venezia," Venice Immersive section

イックス・ウォン・ティエンパオ(パフォーマー)

Ix WONG Thien-pau, Performer



香港演芸学院を卒業後、香港CCDCとシンガポール・アーツ・フィッションでダンサーとして活動。パートナーのアーロン・コク・アーホクとAh Hock & Peng Yu (AHPY)を共同設立。イベントやパフォーマンスの衣装、小道具、セット、照明のデザインを手掛ける独学のティラーでもある。ウー・ミンジンの長編映画「Stone Turtle」(2022年)ではアートディレクションを担当した。2019年のホクの死後、「11:11 A Tribute to Loving」シリーズを含む一連のダンス儀式パフォーマンス「7749Unknown」を制作。ツァン・ツイシャンの短編映画「Ward 11」(2019年) およびVRプロジェクト「Chroma 11」(2022年)、キティ・ヤンの短編映画「A Missing Scene from Floral Princess」(2023年)の出演アーティスト。

Graduated from Hong Kong Academy for Performing Arts, danced with Hong Kong CCDC and Singapore Arts Fission. Co-founded Ah Hock & Peng Yu (AHPY) with his partner Aaron Khek Ah-Hock. Also design costumes, props, sets and lights installation for events, performances, a self-taught tailor. Art direction for Woo Mingjin's feature film Stone Turtle (2022). After his partner's passing (2019), created 7749Unknown — a series of dance ritual performances including 11:11 A Tribute to Loving series, Artist in Tsang Tsui-Shan's short film & VR projects— Ward 11 (2019) and Chroma11 (2022), and Kitty Yeung's short film A Missing Scene from Floral Princess (2023).

ケイティー・ファン(キュレーター、プロデューサー)

Kattie FAN, Curator and Producer



映画、メディア・アート、領域横断的実践の分野で活動するキュ レーター、プロデューサー、映画祭主催者、エデュケーター。2009~

2023年、香港アーツセンター在職中にディレクターとしてifvaアワードとフェスティバル(第20回〜第28回、2014〜2023年)を開催。メディア・アートやテクノロジーによって創造・触発されるアートに焦点を当てたキュレーション・イニシアチブである慈善団体art.wareの共同設立者。現在は大学の非常勤講師として勤務している。

A curator, producer, festival organizer, and educator working in the field of film, media arts, and interdisciplinary practice. She led the ifva Awards and Festival (20th to 28th editions, 2014–2023) as director during her tenure with Hong Kong Arts Centre (2009–2023). She is the co-founder of art.ware, a charitable institution and a curatorial initiative focusing on media arts and any arts created and inspired by the use of technology. Kattie is currently serving as an industry-based adjunct lecturer teaching at several universities.

テレサ・クオン (プロデューサー)

Teresa KWONG, Producer



香港出身のプロデューサー、プロモーター、キュレーター。2023 年まで香港アーツセンターのプログラム・ディレクターを務め、2004 年から2014年まで地方の短編映画とメディア・アートのアワードおよ びフェスティバルであるifvaを主導した。映画、ドキュメンタリー、アニ メーションからVRまで、さまざまなメディアのインディベンデント・プロ デューサーとして、質の高いローカル映画や国際的な共同制作映画 をプロデュースしている。彼女が手掛けた作品は、ベルリン国際映画祭、ヴェネチア国際映画祭、サン・セバスチャン国際映画祭、台北 ゴールデン・ホース映画祭などの主要な映画祭で上映されている。

A Hong Kong born producer, promoter, and curator for cross-disciplinary arts practices. She is the Programme Director of the Hong Kong Arts Centre (till 2023) and previously led the ifva, a regional short film and media arts awards and festival, between 2004 and 2014. As an independent producer in media ranging from film, documentary, animation to VR, she has produced quality local films and international co-productions. Her works have been screened at Berlinale, Venice, San Sebastian, Golden Horse and other major film festivals.

ジェイソン・ラム (クリエイティブ・テクノロジスト)

Jason LAM, Creative Technologist



香港城市大学クリエイティブ・メディア学部卒業。プロシージャルグ ラフィックス、インタラクションテクノロジー、社会支援の経験を持つ。 Add Oil Teamというアートコレクティブのメンバー。

Graduated from the School of Creative Media, City
University of Hong Kong. Lam is experienced in
procedural graphics, interaction technologies and social
interventions. He is a member of an artist collective
named Add Oil Team.

ケイト・ロウ(プロダクション・コーディネーター)

Kate LAU, Production Coordinator



香港城市大学クリエイティブ・メディア学部卒業。ニューメディアの学士号を取得。2018年から2023年まで香港アーツセンターに所属し、メディア・アート関連のプロジェクトをifvaとともに実施した。このプロジェクトはヴェネチア国際映画祭、香港西九龍文化地区、ゲーテギャラリーおよびブラックボックス・スタジオ、香港アーツセンター、駐香港韓国文化院などで展示された。現在、アソシエイト・プロデューサーとしてioio クロスメディア・スタジオに勤務している。

An alumna of the School of Creative Media at the City
University of Hong Kong, she holds a Bachelor of Arts
and Science in New Media. Her tenure at the Hong Kong
Arts Centre, spanning from 2018 to 2023, coordinated
Media Art-related projects with ifva. The projects have
been exhibited at Venice International Film Festival, West
Kowloon Cultural District Hong Kong, Goethe-Gallery and
Black Box Studio, Hong Kong Arts Centre, Korean Cultural
Center Hong Kong, etc. Currently, she is working in ioio
Cross-Media Studio as an Associate Producer.

	- ツァン・ツイシャン
プロデューサー	ケイティー・ファン
7471 7	テレサ・クオン
	- ジェフリー・スティッチ
777117171 9	エリッサ・ロザティ
メハナロフト	
メインキャスト	イックス・ウォン・ティエンパオ
1= (1	<u>アーロン・コク・アーホク</u>
振付	イックス・ウォン・ティエンパオ
脚本	ツァン・ツイシャン
撮影	ジェイソン・ラム
	ミシェル・ジュー
	デズモンド・リュウ
	ボビー・リー
編集	ジェイソン・ラム
アートディレクター	<u>アイフィ・チェン</u>
音楽	ユーニス・マーティン
サウンド	ベニー・チャン
クリエイティブ・テクノロジスト	ジェイソン・ラム
UXデザイン	ジェイソン・ラム
VFX	ジェリー・ツァン
	//J-//>
グラフィックデザイナー	DESIGN OUTHERE
アシスタントディレクター	ヘイゼル・チュー
	- ジェイフォン・ツェー
	キャサリン・チャン
Director	TSANG Tsui-shan
Producer	Kattie FAN
	Teresa KWONG
Associate Producer	Geoffrey STITT
	Elissa ROSATI
Main Cast	Ix WONG Thien-pau
Wall Gast	Aaron KHEK Ah-hock
Choreographer	Ix WONG Thien-pau
Screenplay	TSANG Tsui-shan
Cinematographer	Jason LAM
	Michael CHU
	Desmond LIU
	Bobby LEE
Editor	Jason LAM
Art Director	Iv CHAN
Music	Eunice MARTINS
Sound	Benny CHAN
Creative Technologist	Jason LAM
UX Design	Jason LAM
VFX	Jerry TSANG
	Harry HUNG
Graphic Designer	DESIGN OUTHERE
Assistant Director	Hazel TSUI
	Jevon TSE
Production Coordinator	Kate LAU
	Catherine CHAN
-	-

OPEN SITE 8 | TOKAS推奨プログラム

ツァン・ツイシャン「Chroma 11-無舞之間-」

[展覧会] 会期 2023年12月14日(木)~12月24日(日)

会場 トーキョーアーツアンドスペース本郷

主催 公益財団法人東京都歴史文化財団 東京都現代美術館トーキョーアーツアンドスペース

製作会社 河上風光製作

協力
ベネチア・プロダクション・ブリッジ、香港アーツセンターifva、香港演芸学院、西九龍文化地区

助成 香港芸術発展局

会場施工 スーパー・ファクトリー株式会社

[カタログ] 執筆 ツァン・ツイシャン、シェリス・フォン

編集 辻 真木子、大島彩子、吉田紗和子、小野洵子(トーキョーアーツアンドスペース)

翻訳 クリストファー・スティヴンズ、アンドレアス・シュトゥールマン、トーキョーアーツアンドスペース

撮影 髙橋健治 デザイン 寺井恵司

印刷 株式会社山田写真製版所

発行 公益財団法人東京都歴史文化財団 東京都現代美術館トーキョーアーツアンドスペース

発行日 2024年3月29日

OPEN SITE 8 | TOKAS Recommendation Program

TSANG Tsui-Shan "Chroma 11"

[Exhibition] Date December 14 (Thu) – December 24 (Sun), 2023

Venue Tokyo Arts and Space Hongo

Organizer Tokyo Arts and Space, Museum of Contemporary Art Tokyo, Tokyo Metropolitan Foundation for History and Culture

Production Company River Vision Production

Cooperation Venice Production Bridge, Hong Kong Arts Centre ifva, The Hong Kong Academy for Performing Arts, West Kowloon

Grant Hong Kong Arts Development Council

Construction and Display SUPER • FACTORY Inc.

[Catalog] Texts TSANG Tsui-Shan, Cherise FONG

Edit TSUJI Makiko, OSHIMA Ayako, YOSHIDA Sawako, ONO Junko (Tokyo Arts and Space)

Translation Christopher STEPHENS, Andreas STUHLMANN, Tokyo Arts and Space

Photos TAKAHASHI Kenji Design TERAI Keiji

Printing Yamada Photo Process Co., Ltd.

Published by Tokyo Arts and Space, Museum of Contemporary Art Tokyo, Tokyo Metropolitan Foundation for History and Culture

Publication Date March 29, 2024

Production Company



Developed thanks to











weshKowloon 西九文化區 Supported by



Hong Kong Arts Development Council supports freedom of artistic expression. The views and opinions expressed in this project do not represent the stand of the Council.